服部（関学）・石崎（京大）・林（歯大）さんと現在も各大学で活躍している優秀な人々が多くあります。

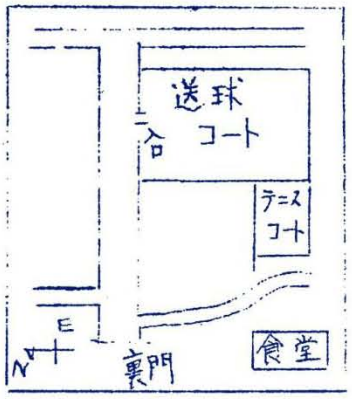
最近は浅野さんにとても熱心に、毎日のように指導していただいて居りますが、今年は在学生の部員数が少ないので、一寸寂しい感じがします。十余年間の先輩方の努力によって築き上げられた立派な伝統を傷つけないように、いや、ますます発展・繁栄しますように現在の在学中の人々の努力を望むと共に、高津クラブ（O.B O.G）の隆盛をお祈り致します。

送球

小西 英博

ドリブル……パス……ドリブル……シュート……。グラウンドのはしからはしへ、一つのボールを追ってひたはしる。頭には体力と技術のあらん限りを出しつくしての何十分間かの緊張と躍動とは青年の心をひきつけずにはおかない。ハンドボールクラブの依頼でこの文を草しつつ、心はその頃の、グラウンドを走りまわっている私の姿を追っているのを感じる。その頃――昭和十四年――は「送球」と言っていた。今日のハンドボールが日本へはいってきてまだ間のない頃であった。送球の祖国ドイツからチームが来日して親善試合をしたりしていた。当時の高津中学校は、時の校長羽生（はにゅう）隆先生の教育方針に副って、対外試合をする運動部は全くなく、そのかわり全校生徒が、バスケットボール、バレーボール、フットボール（サッカー）、テニス、送球という五つの種目のどれかに属して週一回、所定の曜日の放課後運動をすることになっていた。先生方もその中のどれかの指導に当たられた。一年は月曜日、

二年は火曜日というふうに学年ごとに曜日が決められ、五十分間、練習したり試合をしたりしたものだ。サッカーは現在のグラウンド、バレーはグラウンドの北寄りのコート、バスケットは体育館、テニスは食堂の東側、そして送球はその東側でおこなった。食堂の東側から、真田山公園西側を走る南北の道路にかけて、第二運動場があり、



、それが我々の送球コートであった。決められた日の第六時限がすむといっせいに体操の服装に着がえ、通学服を体操袋に入れて北館のグラウンドに面した壁につくられた袋かけに体操袋をかけ、当番がボールを持って全員第二運動場に集合、点呼、準備体操の後球技にうつるわけである。クラブではなく、すべて先生の指導によるものであるから、現在の諸君のように、自主的に練習計画をたてて練習し、練習が終ってからの語らいにクラブ員の親しさが密になるということはないが、それにしても、チームメートとしての親近感が全然ないわけではなかった。

当時は五月に、花園ラグビー場で運動会があった。これは、所謂運動会である。その後十月の末まで、先に書いたような方法で球技を練習し、十一月の、たしか一、二、三の三日間だったと記憶するが校内球技大会が行われ（勿論授業なし）、トーナメントでクラス対抗試合により優勝を決めた。送球には送球、バスケットにはバスケットと、それぞれに応援歌があり、試合当日、開始前と終了後に全員で歌い気勢をあげたものだ。その頃は一学年六クラスであって、一位から六位まで、順位によって得点が与えられ、五つの部門の得点を合計して総合優勝を決めた。クラス全員がどの部門かに必ず属していたせいもあって関心が強く、大会期間中は相当に興奮したものである。府立中学校も大部分は運動部を持ち、対外試合をし、全国大会等にも出場したりしていた中にあって、高津のこのやり方は特殊なものであった。新聞のスポーツ欄に名の出ることもなく、又、全員が選手だったから、技術的にはそう高度なものは望むべくもなかったが、ともするとかたよりがちな運動に、全員が参加するというこの方法は、それ自体一つの教育的見識をあらわすもので、相当高く評価されて然るべきも

のと思う。又、時代は徐々に、そして後には急速に軍国主義化国粋主義化し、外国の球技などするひまがあれば日本の武道をやれ、外国の球技をする奴は、外国かぶれの非国民であるというようだ、今から思えば滑稽ともみえ、さちがいじみているとさえ思える風潮の中にあって、昭和十八年頃までこのような球技をさせてくれた学校の態度には、顧みて無条件に感謝の念を持つ。母校卒業後の進学先でこのことを話したら、全国各地から来ていた友人たちは殆んど皆おどろきの声を発したほどであった。

久しぶりに回顧して、今さらのようなつかしさを覚える。今グラウンドを走りまわっている諸君も、いつかは私のように、今をふりかえってなつかしさをおぼえることであろう。その時期が充実したものであればあるだけ、ふりかえった時のなつかしさは大きく深い。今を充実したまえ。ボールを追って走る諸君の姿をみて、そのみなぎる若さ力強さに唇のほころびを感じる。時代の明日をになう諸君のエネルギーに大きく期待する。

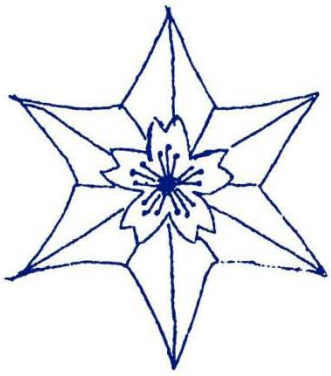
自分のシュートで優勝を決めたうれしさはいつになっても忘れられない、ひそかな喜びであり、ささやかな誇りでもある。

ハンドボールをあまり（全然？）御存じでない校長先生の為に、またハンドボールをやっていながらその起源や厂史を御存じでない方々の為に「ハンドボール略史」を書いてみたいと思います。

ハンドボール略史

ハンドボールの起源は古代ギリシア、ローマ時代からである。当時ギリシアではハルパストーン、ハルパストウリと称するゲームがあり、ボールを奪い合って所定の位置に投げ込むゲームであった。これが今日のサッカー、ラグビー、ハンドボールの始まりと考えられる。ハンドボールの形をした球技は、一九五一年トーアバル（門球）という名称でドイツで女子体育興隆の意図の下に考案され、欧州諸国に普及するに及んで、男子にも次第に愛好されるに至った。現在のハンドボールはドイツのカール・シェ

レッによって創案された。そして一九二〇年にはベルリン体操連盟が正式のハンドボール規則を制定した。そして翌二十一年にはこの規則によって、全ドイツハンドボール選手权大会がハノーバで挙行された。これがハンドボール競技会の最初である。ついで一九三六年のベルリンオリンピック大会には正式種目として加入されドイツが優勝した。

日本では一九二二（大正11）年当時の東京高師（教育大）教授の大谷武一氏がドイツから紹介し、その後新教材として学校体操要目として採用された。スポーツとしては一九三七（昭和12）年第一回関東ハンドボール選手权が行なわれた。太平洋戦争中は、戦力即ちスポーツという思潮が当時台頭し、平和であるべきスポーツにも、その実施の制限があった事は悲しむべき事であった。それでもハンドボールは女子のスポーツとして制限外におかれたが曲りなりにも継続していた程度で、思うほどに進展しないうちに終戦となった。一九四六（昭和21）年の春には早くも東西対抗を行い秋は復活第一回国民体育大会が大阪を中心に行なわれたが、ハンドボールも各種目別の東西対抗で参加した。以後年々盛んとなっている。しかし、ハンドボールはまだ〈一般によく認識されていない、野球のごとく、庭球のごとく多くの人々に親しまれていない。この事実を否定し得る時が一日も早く来るようにと我々は願っている。

さて、我が高津ハンドボール部も創立以来十余年を数え、その活動も、常に活発にしてなごやか、社会に大学にと有能な人物を送り出して益々発展の途上にある。そこで、現役諸君に自らの立場を自覚し、今後のクラブ発展のために全力を傾注してもらう意図をもって、O.B.の思い出話などを綴って頂いた。